

これからの日野町に必要なものは？

大学生田舎ホームステイ「日野町魅力化プロジェクト」



まちの魅力を体感したからこそできるビジネスプラン



若者目線で感じ取った提案に今後のまちづくりのヒントが

8月20日から22日までの3日間、東京富士大学や横浜国立大学、島根大学などの学生9人が、町内でホームステイをしながら地元住民らと交流活動を行いました。

これは、町域おこし協力隊の中山法貴隊員らが、都会育ちの学生に町内でホームステイをしながら若者目線で地域の魅力を生かしたまちおこしの提案をしてもらおうと企画したもので、今年で3回目になります。

学生は、3チームに分かれ農作業や野菜の出荷、日野川くだり(ラ

フティング)などを体験取材。住民と交流しながら日野町の魅力探しを行いました。

22日には、山村開発センターで、「観光」「農業」「移住定住」「空き家」など、まちが抱える課題などをテーマに、町の魅力化について発表。「インターネットを活用した生鮮食品販売」「金持神社のイメージカラー＝黄色を基にしたPR戦略」「空き家を利用した週末農家」など、若者目線でとらえた町のPR方法が提案されました。

中には、すぐにビジネスプランとして実行したいと熱意をみせる学生の姿も。学生の発表を聞きに訪れた人からは、さまざま意見や質問が上がり、活発な意見が交わされていました。

離れていてもふるさとを思う心がまちの活力に

「ひの郷会」「ふるさと住民票」夏の交流会



初めて会う人もまちの話題で交流を深める

8月14日、関西地区在住の日野町出身者懇談会「ひの郷会(小谷誠代表世話人)」と、ふるさと住民票登録者による夏の交流会が、山村開発センターで開かれました。盆の帰省時期に合わせ開かれた交流会には、地域住民も参加。それぞれ家庭料理や郷土料理を持ち寄りたりして、ふるさとの懐かしい話題に花を咲かせました。

交流会後には、根雨のまちなかで開かれていた燈籠まつり・盆夜市に参加する人の姿も。会場で懐かしい人と各自の近況などを話すなど、旧交を温めていました。

駅は地域の玄関。きれいな姿で迎えたい

JR黒坂駅・上菅駅を清掃



上菅駅での清掃に参加した皆さん

8月5日、黒坂地区コミュニティ推進協議会(中原明会長)が、JR黒坂駅と上菅駅周辺の草刈りと清掃作業を行いました。

黒坂駅では、町観光協会の協力もあり14人が参加し、駅裏の草刈りやサツキの剪定、駅構内の草刈りなどを行いました。一方上菅駅では、25人が参加し、駅舎や自転車置き場の清掃や花壇の手入れを行いました。

参加者は、盆の帰省前に地域の顔でもある駅周辺の美化を行うことで多くの利用者に喜んでもらえる満足そうな様子でした。



若林さん（後列右から4番目）と参加者ら

### 興味津々、からくりおもちゃづくり

7月28日、木のおもちゃづくりワークショップとして、木工作家の若林孝典<sup>たかふみ</sup>さんを講師に迎え、「風で動くメリーゴーランド」のからくりおもちゃを作りました。

はじめに、若林さんからからくりおもちゃの仕組みや作り方などを聞き、若林さんや木のおもちゃづくりスタッフの指導を受けながら、おもちゃを作り上げていきました。完成したおもちゃが風を受けてクルクルと回る様子に、参加した子どもたちは満面の笑みを浮かべていました。



写真撮影や迷路を動き回るなど楽しむ姿が

### 満開のヒマワリとパシヤリ ひまわり迷路が今年もオープン

日野町の新名所「ひまわり迷路」が、今年もオープン。8月10日から19日まで、安原地区内の遊休農地を利用して開かれ、町内外から多くの人が訪れにぎわいました。

これは、以前、「日野町魅力化プロジェクト」の中で発案されたアイデアを、町地域おこし協力隊の平林知紘隊員や地元有志、奥日野ガイド倶楽部のメンバーらが協力して実現したものです。

今年は、連日続いた猛暑の影響からか、ヒマワリの発育が良くなかったというものの、約千本の花が咲き誇り、来場者を楽しませていました。

文＝伯耆国たたら頭影会  
副会長 佐々木幸人

第4回  
「鉄穴流し」  
たたらマイスターが、あなたを奥目野たたらの世界に  
ご案内します。

日本に鉄づくりが伝わってきた時、もともとは鉄鉱石を細かく砕いて原料にしていた。でも、日本では鉄鉱石はなかなか手に入らなかったんだよね。そこで、砂になった鉄鉱石、つまり砂鉄を使うことを思いついたわけさ。こうして砂鉄を使った製鉄法、たたらが始まった。

海岸に打ち上げられた海砂鉄と、川に堆積した川砂鉄を使ったのだけれど、この砂鉄だけでは足りなかった。さらに山の地層に埋まっている砂鉄はもつと大

る砂鉄は重いので川底にたまる。こうして比重選別という方法で砂鉄を採るようになったんだ。砂鉄を採る山にはそれ以外の穴があちこちに空いたので、鉄穴（かんなど）と呼んだ。

江戸時代の中ごろ、砂を川まで持つていくのが大変だからと、川を山に持つて行こうとしたおバカがいる。実はこれが逆転の大発想。山に井手と呼ばれる水路を引き込み、山を崩して土砂を水中に放り込んだ。長い水路を流れていくうちに砂は先

粒で柔らかいという事が分かってきたので、山の砂鉄を採取するようになった。

山から砂を掘り出し川に持つて行って流すと、砂は川に流れるけれどそれ

に流れ、砂鉄は水路に留まるようになる。この水路が長いところでは何キロにも及んだ。

また、水源を確保するために山の中にため池を作った。夜は水を貯めて昼に水を流したのだ。こうして作ったため池や水路、鉄穴山と呼ばれる地名も日野町のあちこちで残っている。砂鉄は良い値で売れたので、農家がアルバイトで行ったり、鉄穴師と呼ばれる専門職も生まれた。

しかし、良い事はかりではない。流した砂が膨大であったため、鳥取や岡山では城のお堀を浅くするからと、鉄穴流しが禁止になった。日野川でも川ざらえの命令が出たり、鉄穴流しは米作りに影響のない冬の間だけという命令が出たりした。

そうして流した砂で米子平野や弓ヶ浜が大きくなったのは有名な話。一回のたたらに砂鉄を十トンも使ったらしいけれど、それだけの砂鉄を集めるなんて、日本人はなんて根気強いのだろうと驚かされる。